

---

# 不良桜

水月五月雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不良桜

### 【Nコード】

N4232G

### 【作者名】

水月五月雨

### 【あらすじ】

「なあ、天使とかつて、信じるか？」そんな言葉をこの辺り最強街道騷進中の不良、相模喜助は言った。「俺、会ったことあるんだ」最強の不良が出会った、天使のような人物。そして、天使より告げられた、自分の余命。これは、一人の不良が突然告げられた自分の余命を一人の女子に告白するために使う話です。

## 前話。

ドガッ！ バキッ！ ボスッ！

とある町の繁華街の路地裏で人を殴る音がした。

薄暗くてよくわからないが、殴っているのは長身金髪のつんつんヘアの男であった。

男は学生服を着ている様なので、おそらくは学生であろう。

「うっ…」

殴られていた男は顔を地面に向け、片膝をついて呻いていた。

「懲りたか？ これでよお？」

「す、すみませんでした…」

「これで、うちの学校のやつらには手え出すんじゃねえぞ？」

「は、はい…」

金髪の男はそう言うのと殴っていた男に蹴りを入れた。その殴られていた人は「うっ」と一言呻いた後、崩れ落ちた。

「兄貴イイイ！」

そういつて近づいてきたのは緑色の髪をした男だった。顔立ちが目が細く、しわくちや…いってみれば、サルのような感じの顔だった。

そんなサルのような顔立ちの男が先ほどの金髪の男に近づいて来た。

「さすが兄貴ッす。これで98勝つすね！」

「まあな。この調子でいけばすぐに100勝を超えるな」

「100勝すればこの辺りで勝てる不良はいませんからね！」

「にしてもよ、申野」

「なんすか？」

「天使と違って、信じるか？」

「はへ？」

「いや、ずいぶん前に、会った」

「またまたあ」

「いや、ホントなんだって」

申野は信じてくれなかった。信じるはずがないだろう。天使なん  
てもの、いるはずがないのだから。

(でもあれって…天使、だったよなあ…)

そう思ってどこよりも暗く、そしてどこよりも明るい星が浮かん  
でいる夜空を見上げた。

そして、男は

さがみきすけ  
相模喜助は思った。

ありがとう、と。

## 一話目。

「おはようございまっす、兄貴！」

「おう」

とある高校で交わされる、不良の挨拶。

きつと、どこの学校にもあることだろう。

この話の主人公

相模喜助は思った。

「喜助え〜」

「おう、左近か」

田中左近。相模喜助の唯一無二の一般人の友人。顔立ちはとても良く、「カッコいい」という言葉を体で表現したようなかっこよさ。そのかっこよさに普通の女子は振り向いてしまいうくらいである。

「おはよ」

「おっは〜」

「相変わらず、お前は番長やってんのなあ」

「やってるつもりはないんだけどな」

そう。

相模喜助はこの高校の番長である。

上級生を破竹の勢いで倒し、さらにはひとつの町の不良どもを統一してしまうその強さ。

町の不良たちの頂点に立つ男、相模喜助。

「ま、つええことはつええんだしな」

「……………」

おろ？ どした？

左近は思っ顔を覗き込むと、喜助は今にも泣き出しそうな顔でうつむいていた。

「おう！？」

「左近……………」

「な、なんだ？」

「どひっどひっ…」

「……？」

「どひっどひっ…」

「……？……？……？……？」

「どうして俺はつええのに俺は女にもてねんだよおおおおお  
おおおおおお！！！！」

そう言つて喜助は左近の首と取り巻きの申野の首をそれぞれ片腕  
で締め上げ、ガラガラを振り回す赤子のように振り回した。

「ぐあああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！！！」

「ぐ、ぐるじいッすううううううううううううううううううう  
ううううううううううう！！！！」

二人の頭がトマトのように真っ赤になるまで喜助は振り回してい  
た。そして勢い余つて手を放すと、左近は校庭の真ん中にぶん投げ  
られ、申野は校門の壁に頭をぶち当てていた。

「す、すまねえ……」

はあはあと息を荒げて呼吸を整えていた。

そんな中、一人の女生徒が校庭を横切った。

その女性は凜と立ち、

人形のような顔立ちでそこを通り過ぎた。

通った後にはどことなくいい香りが残っているように思えた。

「……………」

その姿に高校最強の番長は立ち尽くした。

そしてその姿が校舎の中に消えるまで喜助は見ていた。

これが、相模喜助が「初恋」という果実を手にした瞬間だった。

そしてその数時間後、高校に一台の救急車がやってきて、申野、

左近を病院に運んでいた。

しかし、そんなことは喜助には関係がないようにそのままぼつ

と立ち尽くしていた。

## 二話目。

「……………」

喜助は誰もいない自分の家の鍵を開け、入った。

「ただいま……」

そんな事言ってもだれかが返してくれるとは思えない。

喜助はそう思いながらも誰もいない六畳間の中心に寝た。

両親は死んだ。

兄弟はいない。

育ててくれた、叔父や叔母も死んだ。

誰もいない。そんな部屋の中、

一人机を出して茶をすすっていたスーツ姿の男性が、正座をしながら

「お帰りなさい」

と返した。

「誰だお前!!!!!!!!!!!!????????????」

当然このような反応が返ってくるだろう。

「いやあ、いい茶葉ですね。もう五杯くらい飲んじやいましたよ、お茶」

「勝手に人ん家にあがりこんで茶なんて飲んでんじゃねえ！」

そっぴいなながら喜助は握りこぶしを固め、スーツ姿の男性に殴りかかった。

男性はよけようとせず、そのまま手のひらで抑えた。

するとこぶしはそこに壁でもあるかのように止まった。

「やくれやれ。聞いたとおりの気の短さだなあ、相模喜助君」

「!?!? ど、どうして俺の名を……?」

ひょっとして、今流行の詐欺師、というものだろうか。

「流行ってないから。実は僕、こういう者なただけれど……」

そういつてスーツ姿の男性は懐から名刺を取り出した。

全世界死人協会 協会役員兼寿命告知役兼天使役

協会員番号003322659

死期石 司

そして上には死神が持っているような鎌に天使の羽が生えたようなマークがあった。

「私、天使です」

「……………」

新手の冗談か。

すぐに喜助は思った。しかし、この死期石とか言う男が放つ気……お

そらくは本物、だろう。

(天使になんてあつたことがないしな……………)

ひよっとして、自分の魂を狩に来た死神なのかもしれない。

「いや、最近つて便利ですよねえ。昔は告知するのに何回も天使の羽を必要としていたりしていましたが、今の世の中、ワープ装置つてもんがありますからねえ。いやあ、移動が楽ですよ」

羽が生えて自分を天まで連れて行くという喜助のイメージが一瞬にして崩れ去った。

「んで、何のようだ？」

「まあまあ、かけてかけて。あ、お茶飲みますか？ おいしいですよ？ 私のじゃありませんが」

そういつてきたので、とりあえずは座ることにした。落ち着いて話ができない。

「え、あらためて言わせてもらいます。相模喜助君」

死期石が真面目な顔になった。さっきまでへらへらとした顔だったのに。

まるで、死人を本気で送り出すかのように。

「君はあと、12時間の命だ」

「早えよ！ 残り半日!？」

「嘘。残り一時間」

「それも早え！」

「というわけで、さっさと地獄、もとい天国に来てくださいかわいい女の子たちがいっぱいいますよ？」

「ぜってえ地獄だろうが！」

女の変わりに鬼や悪魔がいそうだ。

「プールとか、針マツサージとかもありますし…」

「地の池地獄と針山地獄!？ 俺を待ってんのそれかよ!？」

「というわけで、今すぐレッツゴー」

首根っこをつかんでどこからともなくドアを出してきた。

「ま、まで！ 待ってくれ！ 俺はまだ死ねねえ！」



思いつきり死期石が緑色の液を吹いた。

「てめえ、何がおかしい!？」

「いやいや。君のような不良がすきな人に告白するために寿命を延ばしてほしいなんて…」

そう言いながら死期石は首根っこを放し、振り返って言った。

「わかりました。では、特別に一週間、一週間だけ待ちましょう。」

一週間たったら君に死んでもらいます」

いいですね? とでも言うような顔をしてこちらを向いてきた。

「ああ。構わない」

「では、一週間後」

そういった後、死期石は煙のように姿を消した。

一話目。(後書き)

お待ちしております！

三話目。(前書き)

なれねえよ…ラブコメ…



仕方ないので申野に電話してみることにした。

『はい、どしたんすか？ 兄貴？』

「おう、申野か。じつはな…」

といったところで、思った。

（こいつにラブレターの書き方を教えてくれ、なんていった後…

『え〜！？ 兄貴、ラブレターの書き方も知らなかったんすか！？

うわあ〜…おっくれってる〜！』

な〜んて言われかねない！）

いや、言われなと思いますけど…

『あ、兄貴？ どうしたんすか？ もしも〜し？』

とりあえず電話を切った。そして喜助は考え込んだ。ラブレターと

はどのようにして書くかを。

（ここまで悩んだのははじめてだっ…！）

恐るべし、ラブレター。

そして、数時間後、ヤットの思いで下書きが完成した。

「できた！」

「できましたか」

「うを！？」

そう言っ出てきたのはいつぞやの天使だった。

「死期石！ またてめいつの間に！？」

「いやあ、きみがちゃんとがんばっているか、監視に来たんだよ。

お？ ラブレターの下書きかい？」

そう言っ死期石はひょいとラブレターの下書きを見た。

その内容はこんな感じだった…

はいけい、           さま。

はじめてみたとき、あなたがすきになりました。

というわけで、ぼくとつきあってください。

あなたのことをいつもみているひとり。

「喜助君…」

死期石は喜助の肩にぽんと手を置いた。

そして体は小刻みに揺れている。

「ん…？」

「アツハツハツハツハ、地獄に行くこうか」

そう言つて笑いながら喜助の首をむんずとつかんだ後、ずるずるとまたどこからともなく現れた扉に引きずっていった。

「ま、まて！　なんで連れて行くんだ！？」

「こんなものを出したら確実にバットエンディングしか見えていないからさ」

「なんでだ！？　一生懸命考えて出したんだが！？」

「一生懸命考えて出した答えがこれなんて結構悲惨だよ？」

とにかく、死期石は地獄に連れて行くのをやめて、どこが悪いのかを指摘した。

そして、浮かび上がった問題点はまず一つ。

相手の名前を知らない、ということ。

「いくらなんでも、　　というのはひどいと思うけど？」

「し、しかたねえだろ！？　相手の名前をしらねえんだから！」

死期石ははあ、と一つため息をつくつと、

「君の命はあと六日しかないってことを忘れないでね」

そのことを告げると、死期石はまた、どこかに去って行った。

死期石が去つた後、写真と小さいメモ紙が落ちてきた。

喜助が不思議に思つて見てみると、そこには自分が一目ぼれした女性の名前と詳細な情報が示されていた。

「ありがとよ！　死期石！」

どこにいるか分からない死期石そいつに向かって、喜助は礼を言った。

## 四話目。

死期石の資料によると…

女性の名前は一ノ瀬馨。うちのせかある

俺と同じ年ということだった。

髪の色は茶色。地毛と言うことだ。

顔の方は俺が見込んだとおり可愛い。

血液型はA型。誕生日は四月九日（近いな。残り四日だな）

好きなものは和菓子（特に羊羹）（これなんて読むんだ？）（饅頭）

これなんて読むんだ？）（煎餅）（これは分かる。せんべいだ）。

というより、煎餅は和菓子に入るのか？）と熱いお茶。

苦手なものは虫類。

………。

よし！贈り物だ！！

（まずは和菓子だな…）

そう思つて俺は町にくり出した。

和菓子屋を探してぶらぶらしていたら、見つけた。

和菓子屋、『水月』。

たしか申野が…。

『和菓子屋水月つて言うところは結構ないいところらしいツス！し

かもそこで作られる羊羹はもうめっちゃくちゃうまいって評判ツス

！ ああ…一度でいいから食べてみたいツスねえ…』

と、涎を垂らしながら言っていた。周りが汚いので殴ったが。

早速、中に入った。

羊羹を見てみると結構な高値。しかも包装までしてもらつとなると

結構お金がかかりそうだった。

と、そこで俺はあることに思い当たった。

金がねえ……………。

基本、喜助の所持金はゼロ。

いつも脅したり喧嘩で負けた相手から財布を抜き取っているのだが……。

どうする？ そこら辺の奴から脅して……いや、でも……。

そんなことをしたら確実に死期石から、

『地獄に行こうか』

といわれるだろう。

そんなことはどうしても避けたい。

ならばどうする？

……………働こう。

そうだ、働こう。

ならば就職口を見つけなければ……そう思ってやってきたのは職安だった。

手軽でわかりやすい、しかもお金がたくさん手に入る仕事……

「鉱山採掘なんかがいいんじゃないでしょうか？」

職安の職員は言った。

「喜助さんのような若い人ならば、力は結構あるでしょう？ しかし

も短期ですから、結構稼げると思えますよ？」

「でも、どこにあるんだ？ 鉱山なんて……？」

「意外にも、町の近くに鉱山が出たんですよね……」

ということだ。

「坊主、新入りか!？」

「はい！ 相模喜助ツス！ よろしくお願いしまッス！」

鉱山採掘のアルバイトをした。

学校にはほぼ行っていないようなモノだったので、がんがん働いた。ツルハシを振るい、土を掻き出し、そして良さそうな石ころをベルトコンベアに乗せる……。

そんな作業の中、泥と汗だらけになりながら働いた。

すべては、彼女に告白するため。  
その一心でツルハシを振るい続けた。

翌日。

久々に学校に登校した。

「兄貴！」

いつものように申野がやってきた。しかし、

「……………」

見事に無視。

「あ、兄貴…？」

申野はちよつと驚いた表情を作った。

「お？ 喜助ええええ！！」

鬼気迫る表情で左近がやってきた。

「てめえ！ こないだのあの留守電！ あの後悪夢ナイトメアを見たんだぞ…？」

そう言つて文句を言おうとしたのだが、喜助がとある人物を前にして、

ぽか〜ん

となつてしまつていた。

「あら？ 相模君？ どうしたの？」

そこにいたのは、一ノ瀬馨。

喜助の思い人がそこにいた。

「お、お〜い…？ 喜助え〜？」

喜助は顔を赤らめてうつむいて、  
ものすごい勢いで校門へと走つていった。  
そこにいた生徒は全員、

「な、何があつたんだ…？ 番長に…？」

そう思った。いや、思わなかつた生徒が一名いた。

「あいつ……………」

左近は笑つて、

「つづだなあ……」  
そうつぶやいて校舎へと入っていった。





ようだった。

そうして息を切らした後、喜助は回れ右をして一之瀬に向き直ると、  
「すまんつつつつ!!!」

土下座した。

地面に顔をめり込まんとする勢いだった。

「なんか迷惑だったかもしれん！ 本当にすまん!!!」

「え、あ、その…」

「もうだめだ、俺は生きては行けない！ こうなったら切腹をおお  
おおお!!!」

「わわわわわわわ!!! やめ〜!!!」

何とか切腹をやめさせた。

「…なんで助けてくれたの？」

売店に言ってジュースを飲みながら聞いた。

喜助は顔を赤くしながらジュースの缶を開けようと必死で格闘して  
いた。

「い、いや…な、ななあななななあななんとなく…かな？」

声が裏返っていた。

その感じにちよつと啞然としながらその後、  
くすつ、と笑った。

まるで何かをかわいいと言ったような、ちいさな花びらが咲いたよ  
うな感じの笑みだった。

「そんなことで助けてくれたんだ…」

「な、なんだ？ 変か？」

「ううん。別に」

でもそのままくすくすと笑っていた。それを見て喜助も思わずにか  
つと笑ってしまった。

豪快に、大きな声で笑った。

そしてそこに。

どこからどう見ても、そこには中睦ましい男女がいた。

そこに一之瀬と一緒にいることが、喜助にとっては何よりも、うれしかった。  
ただ、そこにいるだけでうれしかった。

## 六話目。

バイトを始めて二日後。

それなりに金額もたまって、さああとは羊羹を買っただけとなったのだ。

そして、いざ、和菓子屋『水月』に行ったら。

水月の羊羹、品切れ中。

次の入荷は明日となります。

ご了承下さい。B.Y、店主

こんな張り紙が。

「嘘だ…」

お金がたまった財布を片手に張り紙の前に呆然と立ち尽くした。

よりもよって、こんなときに品切れ…!

喜助は口をあけて息を吸い込んだあと、

「嘘だあああああああ!!!」

思いっきり叫んだ。

「喜助君、そんなに落ち込まなくても…」

その日、日は落ちて家に帰ってきたところ、死期石がいた。

「うつせえ…俺の…俺の一世一代の大事なときに…」

「在庫切れなんてねえ…羊羹屋さんなのになんで…」

「しるかっ!!」

そう言つて喜助は布団を広げようとして襖にてをかけようとした。

「じゃあ作れば? 羊羹」

「はあ?」

死期石がとんでもないことを言った。

「馬鹿いうんじゃないよ。素人に羊羹なんて作れるわけねえだろ」  
「作ろうと思えば作れるんじゃない？ 羊羹くらい」

「だから作れねえって。だいたい、そんな設備がどこにあるってんだよ」

「ここ」

そう言っただけで死期石はどこからともなく自分の座っている場所から立ち上がって、穴を作り、そこからさまざまなものを取り出した。

死期石と喜助が羊羹の作り方について話していたところ…。

一之瀬は電話で友達と話していた。

『そーいえばさー聲』

「なに？」

『あんだ好きな奴とかいるの？』  
どきん。

友達がそんなことを言うもんだから心臓の心拍数が飛び上がったよ  
うな気分になられた。

「や、やだなあ、そんな人いるわけないじゃん」

『だよね〜！ 譬って好きな人とかいても告白しようとしたらすぐに倒れそうなのよ！ 奴だもんね〜！』

「もう！ そんなことはないよ！」

倒れるまでは行かないが、好きな人に告白しようとした時に勢いあ  
まっただけでチヨップは出しそうだが。

『あ、ひよつとして、好きな人って…』

「おい、人の話聞いてるか？」

『相模喜助くん？』

お風呂に入っただけではないのだが、頭から湯気が出てきた上に、顔や  
手足が厚くなってきた。

「そ、そそそそそそんなことないじゃん！ だ、だれがあんな…」  
と、言ったところで言いよどんだ。

「あんな…」

『おい、馨？ どうしちゃったんだ？』

「……………」

『あのさ、聞いてるかどうかわからないけどさ、あんまり相模喜助にはかわんない方がいいと思うな、私は』

「え？ なんで？」

それはちよつと聞き捨てはならない。

『だってさ、不良だよ？ ワルだよ？ あの人の馨とは絶対にあわないって』

「うん…」

『それよかさ！ ほら、あのなんて言ってたっけ？ あんたのクラスにいる…』

「琴口くん？」

『そ！ それそれ！ アンタと趣味が合うし、なかなかいい人っぽいじゃん！ 付き合うんだったらああいう人が言いと思うなあ』  
私は』

「ちょ、それはハルっちの意見でしょ？ これは私の恋なの！」

『はいはい。んじゃね』

「うん。またあした」

そう言つて受話器をおろした。すると、

「付き合うんだったら、一度父さんに合わせてくれないかな？ 馨」

そういう声を出したのは一之瀬の父親だった。

「なんで…」

「え？ だって自分の娘の伴侶になる男なんだよ？ ちよつと位見てもいいじゃんか」

「はいはい。それと、伴侶って、この場合使い方間違つてると思うよ？」

「マジで！？ うわ、やっべえ、編集さんに怒られたらどーしよ

ー」

父親の職業は作家である。一応は人気があるらしく、食つに困つた

ことはない。

ちなみに母は一之瀬を産んだときにはすでに他界しているそうだった。

「でもなあ、馨」

自分の部屋に行こうとしていた一之瀬を父親は呼び止めた。

「婿を選ぶときには、やっぱり目を見るよ?」

「なんで?」

「決まってるじゃん。目を見たら大概の奴はいいほうか悪い方って見極められるんだよ。母さんもそーだったな」

「はいはい」

そう言つて一之瀬は自分の部屋に行き、ベットに入って考えていた。

(相模喜助つて、不良じゃん?)

その言葉に言い返せない自分に少し腹がたった。

そんなことない。喜助君は私が不良に襲われそうになったとき、駆けつけてくれた。

その一言がいえなかった自分に、ひどく腹が立った。

## 七話目。

翌日。

「できた…！」

すでに朝日は昇り、すずめが鳴き、どこかの鶏小屋でニワトリが『コケッココー』と鳴いていたその朝。

喜助は、目の前にある黒く、光沢のある長方形のものを見ながら言った。

「ついにできた…！」

「やったね…喜助君…！」

「ああ…！！ 俺たちは、やったんだ…！！ 羊羹作りに成功したんだ…！！」

そう言つて喜助は死期石とともに肩を組んで飛び上がった喜んで万歳三唱をして胸上げ…は無理だったのでせず、とにかく、狂喜乱舞した。

「さあ！ これをもって一之瀬さんに告白しよう…！！ 手紙は大丈夫かい？」

「あつたぼうよ…！！」

そう。前回失敗した手紙は事情を察した左近が指南してくれた。

バイトの合間、おっさんたちが応援してくれていたことも、喜助には分かつていた。

「あとは渡して、思いを伝えるだけ…！！」

「ああ！ さあ！ 学校へ行くんだ！ 相模喜助…！！」

「おう…！」

そう言つて喜助は部屋から出て行った。

そして死期石が物悲しそうにぼつりと言った。

「…これで君の願いはかなえられるんだね…！」

その日の放課後。

喜助は一之瀬を体育館裏に呼び出して待っていた。

その物影には、田中左近と、喜助の腰ぎんちゃく、申野が見守っていた。

しかし、約束の時間になっても一之瀬は来なかった。

「一之瀬の奴：何してやがんだよ」

喜助に聞こえないようにぼそぼそと小さい声で喋っていた。

「へんつすよ。一之瀬さん、兄貴の気持ちにはこたえられるような度量の持ち主のはずっす」

「だよなあ。こんな大事な用事だからちゃんと来る筈なんだけどもあ」

「おれ、ちょっと一之瀬さん…いや、姉御のクラスに行ってくるっす」

そう言っつて申野は後者のほうに走って行った。

左近はそれを見ながらふつ、と笑い、

「アイツが姉御っつて言うなんてな…」

そう言っつてほくそえんでいた。

その頃、一之瀬は。プール裏で告白を受けていた。

告白の相手は、七三狩りでごつい眼鏡をかけて、制服にきちんとアイロンをかけている男子生徒だった。

「一之瀬さん…」

「琴口くん…」

「僕は前々から思っていました：あなたのような綺麗で、可憐で、ビューチホーで、ナイスウーマンなあなたが：好きになってくれたらいいのにな、と」

どっちなんだよ、と、心の中で一之瀬は突っ込んでいた。

と、どうか何なのだ。これから喜助くんと呼ばれて体育館裏に行こうとしていた時に琴口に「プール裏に来てくれないだろうか、大事な話があるんだ」と、言われて来てみたら…。

こんなダツサダサな告白文を聞かされるなんて…。



無駄に長く、おおよそ恋愛とは一ミクロンほどの関係もなさそうな告白文もきつちりと（意味は分からなかったが）聞いていた。そして、琴口からすばやく、スタンガンが引き抜かれ、そのまま一之瀬の首筋に当てられているのも、きつちりと。

## 八話目。(前書き)

ついに、最終話に差し掛かってまいりました…。

## 八話目。

「…っ…」

一之瀬が目を覚ましたところは暗く、じめじめとしたかび臭いところだった。

「ここって…」

そうやって体を動かそうとしたら、手足に痛みが走った。どうやら縛られているらしい。

体がしびれているような感覚に襲われながらも、回りを確認した。

そしたら目の前に先ほど一之瀬に告白しようとしていた琴口がいた。そしてうつむいたまま、琴口は何かをつぶやき続けていた。そしてその傍らには…。

「ひっ…！」

息を呑んだ。ポリタンク。そして微妙に分かるが、やや薄いオレンジ色の液体…ガソリンだろう。

そして手にはマツチが握られていた。

「やあ…おきたんだね…馨」

そう言っただけに琴口はやってきた。

「怯えなくていいんだよ…ただ僕はちよつと耳が遠かったかかも知れないんだ…さあ、こんどこそ、もう一度言っただらん…？」

そして耳元でささやいた。息が耳や首筋にかかる。

「『琴口くんのことが、大好きです』ってさあ…言っただらん…？』ぞわつと鳥肌が立った。

ただ一之瀬は泣きたくなってきた。なぜなら本気で人を怖いと思っただから。特に琴口が。しかし、

「いや…言わない…」

その一言を絶え絶えになりながらも言った。そして殴られた。

「…どうしてかなあ…？何で言っただけなのかなあ？言っただけよ。『大好きです』って」

「…あなたは何か、勘違いをしている」

そして、一之瀬は話し始めた。

「心の底から人を好きになるっていうのは、かなり難しいことなの。そして、愛するということは、もっと難しい。力づくでとった恋なんて、なんにもいいものじゃない。悲しくなるだけ。そんな恋なんていらない。あなただってそうでしょう？　こんな方法はとりたくないでしょう？　今ならまだ引き返せると思うわ。早くここから放して」

願いを言葉の一つ一つに込めながら話した。しかし、

「…さい…」

「え…？」

「…うっさいんだよ!!」

そして一之瀬の腹を蹴った。ずん、と思い感触、そして靴の先の固さが伝わった。

琴口は何度も蹴る。それはまるで、母親にお願いを聞いてもらえなかった駄々っ子のような。

そんな感じに見えた。

「なんでだよ!?　何でそういうことを言うんだよ!?　僕のことをすきつて、なんども、何度も、言ってくれたじゃないか!!　それなのになんだよ!?　いまさら手のひらを返したように嫌いつて!!　ふざけんあ!!　僕は悪くない!!　悪くないんだよ!!」  
そして一頻り蹴つて、肩で息をしていた。

一之瀬は蹴られながらも、ただ一人のことを考えていた。

そしてこんなことも思い出していた。

（「ねえ、私がピンチのときになったら、来てくれるの？」

「つたりまえだ!!　お前がピンチのときになったら、いつでも助けになってやらあ!!」  
）

ぴんちのときになったらあらわれてくれる、せーぎのひー  
るー。

それが、一之瀬馨の、相模喜助に対する評価であり、気持ち。  
：今になって考えてみたら何であんなことを言うんだらうか。今度  
あつたら聞いてみよう。

そして目の前がぼやけていたが、琴口はポリタンクの中身をあたり  
にぶちまけていた。狂ったように、「馨は僕のものだ、誰のもので  
もないんだ」そ、言いながら、そこかしこにぶっ掛けていた。

そしてポリタンクをぶちまけたあと、そのままマツチ棒を擦って火  
を出した。

「馨は僕のものだ…誰にも…渡さない」

そう言つて火をつけた。火は瞬く間にまわり始め、そして辺りを煌  
々と光らせ始めた。

火は熱く、激しく、燃え盛っていた。

## 九話目。

「火事だー!!」

「空き家から火が出たぞー!!」

「火を消せー!! 早く火を消すんだ!」

「消防はまだなのか!？」

「衛生兵ー!!」

等というような阿鼻叫喚のまゝ、騒がしかった。

そしてその中に相模喜助がいた。

「喜助! 何ぼぐつとしてんだ!! はやくバケツリレーに参加しろ!!」

「兄貴、早く!!」

そついいながらも体を動かしていた。

そして喜助はぽつりと。

「一ノ瀬…」

一言つぶやいた。

「はえ!？」

「喜助、何してんだ! さつさと火を…」

言っている間にその辺にあったバケツの水を頭からかぶり、ずぶ濡れとなった。

黒く改造された学ランは水を吸い込み、余計に黒くなった。

「き、喜助!？」

「兄貴!？」

そついつて二人が呆然としている中、喜助は燃えている家の中へと駆け込んでいった。

くらい。

くるしい。

こげくさい。

どこなんだろう。こじは。

なながあつたんだろう。わたしに。

きが…とおくなる…。

「…ちのせ…」

あれ…？

「…一ノ瀬…」

この声は…？

「一ノ瀬！！」

そうやって見つけたのは打撲傷がたくさんある一ノ瀬だった。

ひどく衰弱している。

その傍らにはもはや命はないのだろう、一人の人が転がっていた。

肉が焼ける、人の肉が焼ける、いやなおいがあたりに漂っていた。

「大丈夫か！？ 一ノ瀬！」

「喜助、くん…？」

「よし、まってるよ…今すぐ助けてやつから…」

そういつて喜助は適当に壁を選んでそこに体当たりをしていた。

一ノ瀬はかすむ視界でそれを見ていた。

そして一言。

「…どうして…あなたはそんなに…」

「ああ！？」

「どうしてあなたはそんなに、がんばれるの…？ あかの他人のため…」

そして喜助は反応した。

「好きなやつのために体張らない男がどこにいんだよ！？」

「そして一ノ瀬を抱き起こし、そのまま抱きしめた。」

「一ノ瀬。今しかいえねーけど、言うぞ。…おまえが好きだ」

そういつた後、また壁に体当たりをして通路を開こうとした。

その間、一ノ瀬は周りの炎のせいか、顔が赤くなっていることに気づいた。

しかし、そうじゃない、と言うこともわかった。

そうやっているうちに、壁を壊して通路を造った。

「一ノ瀬、脱出するぞ！」

そういってお姫様だっこをして、そのまま脱出通路に突撃した。そして、もう一歩で外というところで、

朱く燃えた木の支柱が、二人の頭上に落ちてきた。

「……！」

「ふんごらあああああああ……！！！！！」

喜助は渾身の力で一ノ瀬を外へ投げた。そして最後に一ノ瀬がみた喜助の顔は、

「……んお？ ここはどこだ？」

「気づいたかい？ 喜助君」

そこは、船の上だった。

死期石が船を棒状のもので押して、どこかに進んでいた。

そう。自分がいるのは、川だった。

どこの川かはわからない。ただ。

寒く、暗く、そして、すべてが見えない。

そんな川を進んでいた。

「ああ……おれ、死んだんだな」

「うん」

「……なあ、俺の気持ち、届いたかなあ……あいつに」

「さあて？ どうだろうね……？」

「……俺ってさ、どっちに行くんだ？」

「……」

死期石は答えなかった。

しかし、そんなことは意に介さず、喜助は話し続けた。

「おれつてさ、人に迷惑かけてばかりの人生だったんだよな。いろんなことで俺のために頭を下げられたし、いろんなことで、注意とか、怒られたりした。

正直、いきていてもさ、あんまりいいことはないと思ってたんだよ。てきとーにいきて、てきとーに死ぬ。それが、人間つてもんだろ？でもさ……」

死期石がみたとき、喜助の肩は震えていた。若干、涙声にもなっていた。

喜助はそのまま話し続けた。

「でもさ……俺、今初めて、生きてえ、つて思うんだ。この一週間、生きていることが苦痛なんて……っつーか、つまんねーなんて、思わなかったんだ。すんげー幸せだった。この一週間。……でもさ……」

生きてえよ。

向こうで待ってる人がいるんだよ。

俺の帰りを、待ってる人がいるかもしれねーんだよ……」

死期石はそこまで聞いた後、おもむろに語り出した。

「じつはね、喜助君。

僕らはとんでもないミスを犯していたんだ。

君が死ぬのは一週間後、僕はそういったよね。

でも、日付のうちでは一週間はまだすぎてはいないんだ。

だから、この船が向かっているところは……」

## 十話目。(前書き)

最終回です!!

ここまで応援してくださった方々、ありがとうございます!!

## 十話目。

前略、兄貴へ。

あれから兄貴が死んで、一ヶ月がたちました。

兄貴、今どこにいるんすか？

姉御が心配してるっすよ？

ああ、そうだ。

あの事件の後日談を話さないといけやせんね。

あのあと、姉御は病院へ搬送されやしたが、火災の時の煙とかを大量に吸っていたのに、奇跡的に軽傷で済みました。

あれから姉御は学校に通っていやすが…。

元気があります。

そして、この隙に姉御によってくる悪い虫もいやしたが、

俺も兄貴の一番弟子。

かるく、もんでやりやした。

って、これじゃあ後日談じゃないっすね。

ああ、そうそう。もう一つ。

兄貴の不良のレッテルが別のものに代わりやした。

え？ 何の関係があるのか、ですって？ 実は兄貴が死んだ後に、

桜を植えやした。

その桜の名前が、『不良桜』っていうんすよ。

そしてこれが、兄貴の新しいレッテルっす。

かっこいいっしょ？

…兄貴。

早く帰ってきてくださいっす。

俺等寂しいっすよ。

では。これにて。

兄貴の一の子分であり、一番弟子。

申野より。

追伸。

左近さんに彼女ができました。

「申野〜！ 何してんだ？ はやくこ〜い！」

「あ、は〜い！ 今行くつす〜！」

そういつて申野は誰もいない夕暮れの校舎から飛び出し、桜の木の麓に瓶に詰めた手紙を埋めた。

「…まだ、喜助のことを…」

「これでいいんす」

そしてそのまま帰って行った。

そんな様子を陰から見ていたのは、一ノ瀬だった。

「喜助君に…届くといいんだけど…」

そういつて食べていたのは羊羹だった。

そしてそのまま、桜の木の麓に座り込んで食べてていた羊羹を半分、供えるようにしておいた。

そして静かに合掌した。

「喜助君…あのときの返事、まだだったね…。」

私ね。小さい頃、結構ないじめられっ子だったんだ。

でもそんなとき、いつもとある男の子が助けてくれたの。『弱いものいじめすんじゃない〜！』って…。でもそのたびにその子は泣いていたんだ。その子、あんまりケンカ、強くなかったんだ。でも、そのたびに言ってたんだ。

『おまえは俺が守ってやる！ だから笑ってる！』だって…。ふふっ…。」

そういいながらも、ぽつり、ぽつりと羊羹の上に水滴が落ちていた。

その水滴の正体は、一ノ瀬の目から出てきた涙だった。

その涙は、茜色に輝いていた。

「好きです…！ 喜助君…！ だから帰ってきて…！」

そういつて泣いているその桜の木の裏には誰かが座っていた。

「一ノ瀬。泣くんじゃねえよ。やっぱ女は笑っている方がきれいなんだからよ」

その声にはつとなり、顔を上げた。するとそこには。

あのと看…助けてくれた当時のままの、笑っている喜助が、そこにいた。

「いや、なんか向こうの方で天寿全うしてくれって言われてな。帰つてきちまったよ」

「……カ……」

「へ……？」

「……バカ……！」

「一ノ瀬。もう一度言つぞ。」

おまえが好きだ。つきあつてくれるよな？」

「……はい……！　こんな私でよければ、喜んで……！」

…後にこれは伝説となる。

これは一人の不良が、人生を一週間で終了する、と宣告され、結局はそのまま帰ってきて、一人の女の子に告白した…。

ちょっとした、恋の話。

十話目。(後書き)

とうとうおわったよおお!! 不良桜!!

きつかったよ! 初めてのラブものは疲れたよ!!

でも! でもでも!!

なんかよかったよおお!!

ここまでがんばった自分にはくしゅ!!

そしてつきあってくれた読者さんに拍手!!

ありがとうございます!!

ではこれにて!!

以上!! 水月五月雨でした!! (感涙)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4232g/>

---

不良桜

2010年12月4日05時04分発行